

男はフト女の姿を見るより、直にも走り寄りたき心も、一度去りし手前ゆゑうもならず、
 シテ「聞まほしの御聲や、あれは妻にてましますか、ざりとは歸りあひ、狂氣をやめてたひ給へ。
 「御聲や」ましますか」がささの「やい女共」と對して雲泥の變化なり。我が請を容れ給はゞ狂氣が止む
 べしとなり。

女「見めの悪きは生れつき、一度去りたる中なれば、何しに歸り逢ふへま。
 「見つともない醜女よ」と毎々言はれしが執念くも忘れず、どうせこんな不締備者故、やつぱり離れた
 方がよいてせうとは、例の女のすね方なり。口には言へど心は然らんや。一とかどの自惚鏡に十日も
 二十日も向ひ居る氣なるべし。

シテ「見めの悪きとはく、唯酔狂のあまりなり、誠に見目は美しや。
 御世辭にもかう言はれて見れば實正うれしくして堪らぬは女の心なり、

女「それは誠か

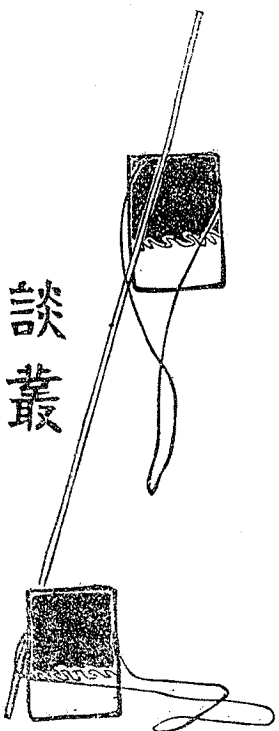
ささの恨も悲も風に排ふ雲霧と散じ盡して、心中は、新しき喜滿ち來れるなり。男も満足、調子に
 乗りて、

シテ「中々に、一ひとの見目の好いは、田中權の頭の繼娘、聳になりたや、南無三寶、なういとうし
 の人、こちへ渡しめく。

女「心得ましたく。

「い、ちのひとの見目よは」はこの頃の小唄なるべし。「聳になりたや」とウツカリ言つて見たが、女
 を側へ置いての浮かれ言葉に氣がついて、南無三寶と口を押へる所が滑稽なり。いとほしの人此方へ

來給へと手を引けば、待つてましたと女の方からも寄り添ふ。心得ましたの出様が遅かつた位のこと。
 めてたく局を結んで見物は拍手喝采なるべし。



談叢

能裝束雜話

古市公威

物着方の保存

裝束の話なら先づ第一に叫ぶべきことは物着せ役の保存である。今日では一人の物着専門家がゐるば
 かりだから、とても方々の能に間に合はない。藝も中以上の黒人となるとさまで困らないかれない
 が、大抵の者は物着の不自由の爲、切に苦痛を感じてゐる。分けて素人はそうだと思ふ。物着は附け
 方の上手下手といふ外、手早に旨い處が非常に尊い。問狂言の語の間にちやんと着せてしまふ位でな

ければ藝に大變さしひびく。間語がすんでもう出羽にかゝつてゐるのに指貫がちんばになつたりしてまごついてゐると、シテの方は氣が氣でなく、やつと幕を出た處で、さつぱり落ちつきのない拙い能しか出来ない。黒人でも随分そうだといふ。故清之などは自分着る事も人に、着せる事も上手だつたが、シテとして黒人でも物着専門ぢやないからかういふ人は少い。従つて物着せ専門の後繼者をどん／＼作り出さねばならぬ。樂師も樂師だが、これも中々今日の急務である。尤もこれは人々も氣がつかぬとてはないが志望者が少いのであらう。ワキツレか何かの者にやらせると丁度いゝ仕事だと思ふ。あの作物なども物着役の仕事で、作物は流義々々物々の寸法が定まつてゐて。これ女けても中々の専門で、物着役としての職業は充分立ち行くから、是非今の間に早く後繼者を作る事に盡力したいものである。

苦しい装束

物着の必要はさきにもいつた如く、わけて指貫などのとき、切實に感じる。自分の経験ではあれ位厄介なものはない。着ける前にちやんと寸尺を定めてすぐびつたり合ふやうにして置くのだが、さて着けて見ると中々合はぬ。きつとちんばになる。いつもあれには閉口してゐる。それから舞臺へ出てから厄介なのは邯鄲の着流してある。あれは替装束で、頭も唐頭巾といふ一寸面白いものであるが、何分裾が着流しのまゝだから、立つにも坐るにも餘程工夫しないと前があいてズボン下が見へるといふ譯だから見苦しい。

それだから随分無理な窮屈な構へをしなければならぬ。實にこれには弱る。殊に臺の上へ轉び上つて寝るんだから仕末が悪い。装束に對する技藝の練習といふ事も難しいものだ。

近見遠見

其れから装束模様の選み方も餘程練習ものである。素人はつい手近く見てこれが奇麗だと思つて着けて出ると、案外舞臺榮えのしない事が時々ある。いつか道成寺を舞つたときに、清之が二流れの衣装を出して、好きな方をとれといふから、新しい方の、即見た處美しい方をとつた。一方のは模様もちんば／＼で見すばらしいものであつたから、無論今選んだ方がいゝと思つてゐたが、一向舞臺晴れがしなかつたそうだ、處てその後清之が舞つたときにはそのちんば／＼の方を着たが、こつちから見ると如何にも美しくつて僕が以前着たのよりははずつと引つ立つてゐた。

晴れ立つた装束

嘗て某處に、唐織があつた。模様が如何にも珍らしく、是非これを求めなければならぬと思つて、故梅若實に謀ると不賛成であつた。その理由はかうだ。あんな珍らしい模様となると、今我々が目を附けたやうに、舞臺でも人がすぐ目をつけて、深く印象して仕舞ふから、其後また着る事があると、あれは、いつか何々のときに着たあの唐織だとすぐ注

意する。それだから使用する度も減るし、またたまに出しても、矢張りすぐ人の目に入るから損だ。装束はどうしてもそんなに晴れ立たない方が飽かなくつていゝといふ話だつた。

能装束の變遷

今 泉 雄 作

博物館部長今泉氏を中根岸の私邸に訪ふた、氏は折柄退廳された時であり、且つ家宅新築中にて、頗る多忙なるに拘らず、予を一室に導き、間に對し左の即答を與へられた、され共時日切迫の爲め校閲を經るの暇なく、唯記憶に存するまゝを記したるなれば其の文責の記者にあるは勿論である。

(如翠生)

能樂維持ですか、其れは無論です、此の結構なものを絶すなどいふことがあつて良いものですか、廣く淺くなつて實質が衰える、其れは能計りでありませんよ、今の世の風潮ともいふのでせう、宗教でも、茶の湯でも、表面は中々賑かな様で、其實本領は次第に荒廢に傾いて居ます。能装束ですか、無論足利時代ですが、併し立派になつたのは、信長以後、豊臣、徳川の代になつてからでせうな、昔の装束は蜀紅とか金襴とか眞の唐物で、拵へ方も少く袖幅も狭かつた様です、能装束の發達は日本織物の進歩と密接の關係を持つて居るといふてせう、今の唐織だとか厚板だとかいふものは皆日本で織つたものですが、此の能装束に金を描まず掛けることゝなつてから、日本の織

物は非常の進歩をしたもので、一方から言へば、能樂は日本織物の發達を促したとも言へますよ。

天和から元祿へかけては次第に一般の衣服が華美になつた時代で、男物でも立派な模様を附ける位であつたのですから、能装束も此時代からのものは大ひに立派になつたてせう、彼の新井白石などが出て、華美を戒める傾向となり、法律を以て衣類を立派にすることを禁じましたが、能装束迄は干渉せなんだから、諸大名が一方で抑えられた豪奢心を能装束の方へ傾注し、金は幾干でも構はぬから良い品を作れといふ鹽梅で大ひに能装束を立派にし、元文から寶歴迄が絶頂で、樂翁公時代一頓挫し、文化文政となつて大ひに衰へたてせう、過日三越に陳列してあつた装束などは皆立派でしたが、多分寛正以前のものです、又徳川以前の古いものも無かつたと思ひます、併し前田家は別で、是れは随分文政以後にも良いものが出来たてせう。

法被半切ですか、成程法被といふ字から見ると佛衣の方から出たかも知れませぬな、僧衣は元は装束から轉じたもので袍と裙とを接合したものです、律宗のものに半分にして下には腰衣といふを穿きます、又僧衣に直鬢といふがりますが、彼の茶人などの着る「チットク」といふは是れから出たので、是れらから考へて見ると、此邊のものを元とし之れを立派に仕立て、法被となつたのではないかと思ひます、後世職人扱の着て居るものにハツピといふがあります、是れは定めて能の法被から出たのでせう、併し是れは唯ほんの即席の考へて、考證を重ねて見たらば何か他に據り所があるかも知れません、半切は即ち半を切つたので切袴を立派にしたのでせう、能装束は總て立派に見せる様に拵へたもので、硬く太く作り横幅も奥行も成るべく大きく見せる様に拵へたのです。